

『劔岳 点の記』映画監督

木村

KIMURA
Daisaku

大作さんに伺いました

聞き手

遠藤 和弘
編集委員[writer] 澤田 裕
[photo] 永田 正男

最後のシーンの前に登場する「なにもものにもとらわれず、なにもものも恐れず、心のままに」という言葉は、この映画のために2年間かかってやっとひねり出した。

2009年2月10日(火)
東映(株)人間の美しさは
自然の厳しさに対抗するところから

——木村監督がこのたび『劔岳 点の記』(新田次郎)を映画の原作として選ばれた理由を教えてください。

木村——今の日本映画では、絶対に取り上げない作品だというのが第一の理由なんだ。昔はいい映画をつくらうという思いありきで、当たったとか当たらなかったというのは二の次だったんだ。

それが今は「当たらなければダメ」という価値観に、つくる前から支配されてしまっている。しかも原作の舞台は標高3000mの世界で、CGを使って撮るなら方法はあるけど、自分でも実写では無理だと思っていた。

それがたまたま時間ができたときに旅に出て、冬の日本の荒波を撮ろうとした。でもさっぱり波が立たないのであきらめて東京に戻る途中、ふと「劔岳を拝んで帰ろう」と思ったんだ。そして真つ赤な朝焼けのシルエットの劔岳を見たら、やっぱりいい山だなあと、山を見ながら本を読み直してみた。それで、「これを映画にしたいなあ」と思いが募ってきたというわけ。

——劔岳を見て本を読み返そうと思ったのは、何か監督の心の中に残るものがあつたからでしょうか。

木村——山岳地帯での測量は登ってからが仕事で、視界が悪ければすぐごと引き返すしかない。それは撮影も同じで、そういう意味で測量の世界は、自分の人生と重ね合わせて考えられるものがある。だったら新田次郎さんの原作を借りて、自分の思いを全部たたき込もうと思った。

それから死んだり病気になったり悪い奴をつくったりすると、そこにドラマができると勘違いしている人が多いけど、僕はそういう映画を見るとうんざりする。新田さんは黙々と仕事に献身している人たちのことを、淡々と描いているだけ、僕はそのスタイルのままに映画にならないかと考えた。そして圧倒的な自然。人間の美しさは、自然の厳しさに対抗するところから出てくるんだよ。

誰かが行かねば、
道はできない

——試写を拝見して印象的だったのは、「何をしたかではなく、何のためにしたかが大事だ」という言葉です。あの言葉は監督自身のメッセージだと、映画を拝見したときに印象が強く残っています。

木村——もともとは「人間の真価は死んだと



木村 大作(きむら・だいさく)さん プロフィール

1939年東京都出身。1958年東宝撮影部にカメラ助手として映画界入り。1973年『野獣狩り』で初めて撮影監督に。代表作は『八甲田山』、『復活の日』、『駅 STATION』、『火宅の人』、『夜叉』、『鉄道員』など。『劔岳 点の記』で初めて監督を務める。

きに何をなしたかで決まるのではなく、生きていたときに何をなそうとしたかで決まる」というロバート・ブラウニングの言葉なんだよ。これを山本周五郎が取り上げて黒澤監督がシナリオにした。『雨あがる』(小泉堯史監督)では、この言葉を使っている。時代を経て、世界的な思考の積み重ねのなかで生まれてきた言葉だから。

そして自分がこの映画の答えだと思った「なものにもとらわれず、なものも恐れず、心のままに」という柴崎芳太郎の言葉は、柴崎を演じた浅野忠信さんが色紙に書く「自由」という言葉に触発されたもの。最後のシーンの前を撮るとき彼に示したら、「いいですね」と言ってくれた。

をして登ってきても、そこで解放感や達成感に満たされる。

さっきの言葉は、2年間かかってやっとひねり出したんだ。原作にはない言葉だけど、藤原正彦さん(『国家の品格』の著者で、新田次郎さんの次男)にも「父の原作にこだわらなくてけっこうです」と言ってもらえた。

黙々とやっている人 認める人が出てくる

——監督は、「光と影、影があるから光るんだよ」と映画に関する照明についてお話しされています。その思いに触れ、「土木は影かもしれない。ならば徹底的に影に徹してみよう」と思うのです。

木村——測量の世界は伝えにくいものだけど、主人公の生き方はシンプルだし、ドラマとしては理解してもらええると思っている。

試写を見た若い人も、「黙々と生きているのがいい」と言ってくれた。誰かに認められようとしてやっても、それは相手には伝わらない。その思いを捨てて黙々とやっていると、初めて認める人が出てくるというものなんだね。

——本日は公開前のお忙しいなか、ありがとうございます。ごじやいました。

※映画『劔岳 点の記』に関する詳細については、13ページを参照してください。